

『賢治を探せ』(2003年9月10日講談社選書メチエ刊行) 梗概

Recherchez Kenji

千葉 一幹

CHIBA Kazumiki

Qui est Kenji? Il est penseur, révolutionnaire ou saint bouddhique? Avant tout, il est écrivain-chercheur. Il a poursuivi, en effet, la parole vraie (makoto no kotoba) durant sa carrière littéraire. Ce livre a pour but d'étudier les possibilités de l'œuvre de Kenji Miyazawa à travers de l'éclaircissement de propriétés de la parole vraie.

Dans le premier chapitre nous envisageons le sujet de "hinoki (cyprès du Japon)" qui s'emploie souvent chez Kenji, surtout ses Tankas (poème court japonais), en association avec des tableaux de V.Gogh qui portent sur les cyprès.

第一章では、まず賢治が文学的表現において最初に選んだ短歌という表現形式の意味を論じた。それは、一つには、明治以降の日本の文学において賢治の文学表現が、どのような位置にあるかを確認するためであった。簡単に言えば、賢治の短歌は、日本の短歌表現とは異質なものを抱えており、それがその後開始された『春と修羅』において結実する表現形式の基盤になっていると考えられたからである。また、あわせて、盛岡高等農林時代に製作された短歌群と詩編「春と修羅」との主題的関連も考察し、そこから賢治が捉えた「まことのことば」とは、一般化するとどのようなものかをフロイト及びそれに依拠して独自の夢の意味を論じる新宮一成の論を援用して明らかにした。

また、今回の特別研究費のテーマでもある風土と賢治作品との関わりという観点で、この章では、賢治作品で度々現れるヒノキの主題について考察した。ヒノキとは、本来賢治の生きた岩手では生育しない植物であるが、賢治が好んだ画家であるヴィンセント・ヴァン・ゴッホの糸杉の絵との関係から、この植物が賢治作品にしばしば現れることとなった。そこに賢治の、風土についての思考が集約的に現れていた。

第二章では、第一章で「まことのことば」の意味を一般化して論じたのに対して、ここでは、逆に賢治自身の表現にそって、いわば内在的視点から、「まことのことば」がいかなるものと思念されていたかを論じた。そこで問題になるのは、「まこと」の対概念である「うそ」である。賢治が「まことのことば」を求めるとすると、当然「うそ

のことば」は廃されねばならない。ならば、ウソとはどういうものなのか。それをソーシャルの提示した言語の恣意性の問題と、それへの批判を言語の媒介性という視点から問題にした。

第三章は、言語の問題を少し離れ、貨幣の問題を論じた。言語の問題から突然貨幣の問題に移ることに異和を感じる人もいるだろう。ここで、貨幣を主題化するのは、ひとつには言語の媒介性の意味を明らかにする上で有益であると判断されたからだ。第二章でふれたソーシャル自身、言語を貨幣と相同的なものとして捉えており、それは、マルクスにも当てはまるが、言語と貨幣を相同的なものとして捉えられるのは、両者ともにコミュニケーションの手段であるからだ。しかし、ともにコミュニケーションの手段として類似するというのではなく、相同性の一番肝心な点は、両者とも媒介的コミュニケーションであるということである。言語の媒介性の意味を知る上でも、貨幣についての考察は有益である。また、賢治作品における貨幣の意味も考察の対象とした。

第四章は、媒介性を三人称性という観点から考察を加えた。この三人称性は、柄谷行人が『探究Ⅰ』『探究Ⅱ』などで使った「外部」という概念が一つの淵源となっている。しかし、「外部」という用語では、結局「外部」対「内部」という二項対立の図式に還元されてしまい、「外部」が持っている意味、それは他者性ということだが、それが十分に表現できないと考えた。それは、いま使った「他者性」も同じで、これも同一性に対する他者性なり、自己対他者という二項対立に行き着いてしまう。それは、これまでの言語論、コミュニケーション論が、話し手と聞き手という二項図式でコミュニケーションを考察しようとする問題点にも通じる。話し手と聞き手という図式で言語を考える問題点は、結局そうしたとらえ方では、ソーシャルがパロールに対するラングというものを想定した意味が十全に捉えられなくなることにある。ラングがパロールという発話の現場、つまりは現実に言語が使用される場に対する構造体としての言語を意味するとして、なぜそのようなものを想定しなければならなかったのかが分からなくなってしまうのだ。どこかに、古美術品の貯蔵庫のような形で、構造体としてのラングがあるわけではない。それは、結局パロールという現実の言語使用を通じて現れるにしか過ぎない。しかし、また、ある具体的言語使用が、構造体である、簡単に言えば規則性が

あるということは、実はその発話の現場では確認されない。同じ表現を最初発話の場にいたのとは違う誰かに向かって発して、それが有意味と考えられる反応を引き起こしたときに、初めてその言語使用が規則的なものであったということが分かるのである。そのような意味でラングとしての言語は、その発話の現場には帰属しない第三者すなわち三人称的人物により保証されるということである。また、三人称性は、大澤真幸のいう「第三審級」とも近い概念である。しかし、大澤の「第三審級」は、結局絶対神のような超越性を帯びた存在者を想定したものである。しかし、私の使う「三人称性」は、必ずしも超越的なものではなく、むしろ単に話し手—聞き手という発話の現場に帰属しない者全てを意味するものである。

第五章では、賢治作品の代名詞といってもよい『銀河鉄道の夜』を対象にした。それは、賢治が、その死の直前まで、改稿を繰り返していた作品であり、かつ入沢康夫と天沢退二郎による『銀河鉄道の夜』の草稿研究により明らかになったように、四次稿まである『銀河鉄道の夜』において、三次稿から四次稿に至る過程で非常に大きな改変が加えられており、この改変により、賢治が死の直前において到達した場所が明らかとなると考えられたからだ。

そして終章では、手短にもう一度賢治が表現、文学的表現により辿り着いたところ、彼が求めた「まことのことば」は、実現されたのかを確認した。

執筆者

千葉 一幹
CHIBA Kazumiki

教養部
General Education
助教授
Associate Professor